

指導時間や指導内容の柔軟化と1人1台端末等の活用で通級生の自主性を育む

《 概要 》

当該生徒は、中学校第1学年の9月頃から、部活動や人間関係の悩みから長期欠席が続くようになった。

学校復帰を目指し、教科や学習活動を自己選択させたり、他の通級生との共同作業や交流活動へ参加させたりするなど、指導の充実を図った。

個別の相談活動や定期的な学校訪問、個別の支援検討会議を実施するとともに、学校や家庭に電話や文書で、当該生徒の通級の状況を報告し、情報共有を図った。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

学力を維持し、学校復帰への意欲の継続

自主性を育む活動やタブレットPC等を活用した学習意欲や興味・関心の高揚

在籍校や家庭と連携し、児童生徒の理解と支援の適切化

相談・支援、取組等の状況

- ・当該生徒は、真面目で理解力も高いことから、通級開始当初は、当該生徒が苦手な英語に重点を置いた個別指導を行った。
- ・定期テストに向けて、理科や社会等の学習を行った際、当該生徒が高い学習意欲を示したことから、日常の学習に取り入れた。
- ・定期テストの際、当該生徒は登校し、別室で受けることができた。
- ・毎日の学習内容を自己選択させたり、野菜の栽培や収穫、小物作り等の作業活動を取り入れたりするなど、当該生徒の状況に合わせて柔軟に学習内容を立案し活動に取り組ませた。
- ・タブレットPCを活用し、分からない事柄を自分で調べたり、理科の実験や歴史の動画等を視聴したりすることによって、学習意欲や興味・関心を高めることができた。
- ・毎日の通級の状況について、当日中に学校へ電話連絡し、情報共有を行った。
- ・月初めは、学校や家庭に前月の通級の状況について文書で連絡した。
- ・夏季・冬季休業中に、保護者との二者懇談を行った。

《 取組の成果 》

通級開始当初は、当該生徒の小学生時の活躍を話したり、当時の動画を見て頑張っていたことを賞賛したりして、当該生徒の自信の回復に努めた。

英語の学習について、苦手意識から徐々に心理的に追い詰められる状況が見られたため、当該生徒に他教科の学習への変更を提案し、通級への負担感を減らすことができた。

学校や家庭に通級時の様子を肯定的に知らせることで、家庭から通級に対する理解と安心感が得られ、当該生徒は進路を自主的に選択できる力を身に付けることができた。

体験活動の充実とICTを活用した支援

《概要》

教育支援センターみらい塾では、学習支援や体験活動を通じて、不登校児童生徒の「社会的な自立」や「一人一人の目標」の達成に向けた支援を行っている。

体育館での運動や農園活動、社会見学など様々な体験活動を充実させることにより、一人であらで家で過ごすのではなく、みらい塾へ通いたいと思えるような機会を増やしている。

ICTを活用し、みらい塾において、オンラインで学校の授業を受けたり、学習予定や行事内容を確認したりできるよう、学校と情報共有し、支援した。

《相談・支援等の実際》

目標・方向性

社会的な自立に向けた支援

一人一人の状況に応じて、通いやすさを優先

体験活動の充実による、みらい塾に通う意欲の向上

ICTを活用したオンラインによる授業参加

○ ICTを活用した欠席時の状況確認

相談・支援、取組等の状況

- ・教育支援センターみらい塾(以下、みらい塾)では、学校復帰だけを目的とせず、社会的な自立に向けた支援を行っている。
- ・みらい塾では、午前個人学習、午後体験活動を設定しており、一人一人の体調や状況に合わせて、好きなタイミングで通うことができるよう工夫した。
- ・毎週木曜日を体育館で運動する日としたり、農園活動、社会見学、遠足、サイクリング、陶芸、フィールドワーク等、毎月様々なイベントを企画したりすることにより、不登校児童生徒がみらい塾に通いたいと思えるような機会が増えるよう取組を進めた。
- ・みらい塾から、オンラインで学校の授業に参加することができるよう、学校と学習予定や行事内容について情報共有し、不登校児童生徒の学びの保障に向けて支援した。
- ・Google Classroomで、日々の取組について情報発信することで、不登校児童生徒や保護者が在宅時にも、みらい塾でどのようなことが行われたのかを確認することができるよう工夫した。

《取組の成果》

不登校児童生徒が増加していても、みらい塾への登録者数が増加しないことが課題であったが、令和5年度は登録者数が約1.5倍となった。

体験活動を企画することで、児童生徒が通級に通う機会が増えた。

ICTを活用することで、みらい塾に通いながら、学校とのかかわりをもつことができる機会が生まれた。

人間関係を学ぶ場としての適応指導教室の役割

《 概要 》

当該生徒は中学校第3学年の生徒であり、第2学年の4月から教室に入ることが難しくなり、校内の支援室(別室)で学習を行っていたが、10月から適応指導教室との併用を開始した。

校内の支援室では、教科等の学習を中心に行い、適応指導教室では、本人の特性に応じて、場面に即した適切な言動を集団活動の中で身に付ける支援を中心に行った。

学校や家庭、各関係機関で当該生徒について情報共有を図り、一貫した支援を行うことで、当該生徒は適応指導教室の各種体験活動の集団活動に積極的に参加できた。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

○ 在籍校の支援室での学習の取組(午前)

本人の特性に応じた支援に向けた取組

適応指導教室で集団活動の取組(午後)

相談・支援、取組等の状況

- ・校内の支援室で教科等の学習に取り組んだり、定期テストを受けたりした。
- ・必要に応じて、適応指導教室で学習支援を行った。
- ・当該生徒は学習内容の定着に課題が見られたことから、学級担任や保護者、SSWなどで、本人の特性に応じた支援に向けた取組について共有した。
- ・保護者及び学級担任との懇談を通して、毎月、通級の状況について情報共有を図るとともに、当該生徒の状況に即した関わり方を細かく確認した。
- ・当該生徒はスポーツ活動や創作活動、調理実習、自然体験学習、百人一首、農園活動など、グループによる多様な活動に参加した。
- ・当該生徒はクリスマス発表会では、他の通級生とともに器楽演奏や合唱に参加し、3年生のときは司会に立候補するなど、積極的に活動する姿が見られた。
- ・当該生徒は保護者の送迎に加え、自らバスで通級し、通級回数が増えた。

《 取組の成果 》

自ら行事の司会に立候補するなど積極性が身に付き、他の通級生に対する暴言や身勝手に振る舞うことがなくなり、集団活動に参加できるようになった。

通級日が週2日から週3日に増えたことで、他の通級生と打ち解ける様子が見られた。

定期的な面談を通して、保護者の安心を得られ、一貫した支援を継続して行うことにつながり、当該生徒は、各教科の学習に意欲的に取り組み、自分で進路を選択することができた。

対話に基づいた信頼関係の構築と安心・安全な環境の整備

《 概要 》

当該生徒は、中学校第2学年の9月から体調不良による欠席が増えたため、保護者の意向により、SSWと面談を実施し、中学校第3学年の5月から通級を始めた。

通級当初は、慣れない環境に不安を抱え、落ち着かない様子が見られたが、職員が当該生徒の心に寄り添いながらコミュニケーションを取り続けたことにより、改善が図られた。

通級状況は安定しているが、他の通級生と関わりをもつことができず、集団活動の際に一人だけ距離を置いたり、活動に参加できなかつたりする場面が見られた。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

安心して学べる学習
環境の整備

自立的な進学準備に
向けた相談・支援の充
実

相談・支援、取組等の状況

- ・他の通級生と一緒に学習することに対して不安が募り、落ち着きをなくす、学習に集中できない、トイレに留まるなどの状況が続いたことから、学習する内容を一緒に考えたり、取組に寄り添ったりすることによって、当該生徒との信頼関係の構築に努めた。
- ・論理的な思考力、数学的な見方・考え方に優れており、難易度の高い問題を一緒に考えたり、解き方を交流し合ったりすることで学習意欲が向上し、落ち着いて学習に向かう姿が見られるようになった。
- ・学校とのつながりが希薄で、進路に関する情報が入手できない中、進路や生活の改善に向けた相談・支援を充実させることにより、進路選択や情報の収集、願書の作成をはじめとする受験に向けた準備を自立的に進めることができるようになった。
- ・当該生徒は、人との関わり方に困難を抱えており、受験の面接は高いハードルとなっていたが、当該生徒の進学に必要なことを丁寧に説明し、粘り強く面接の練習を繰り返したことにより、本番では落ち着いて面接に臨むことができた。

《 取組の成果 》

当該生徒の心に寄り添い、相談・支援を充実したことが、信頼関係の構築につながった。

- 当該生徒との信頼関係を構築したことにより、当該生徒にとって安心・安全な環境が整い、継続的に通級することができるようになり、自立的に進学準備に取り組むことができるようになった。

当該生徒の気持ちや状況について家庭と情報共有することで、保護者が当該生徒の頑張りを認めるようになり、以前よりも親子関係が良好になった。

ICTを活用した学習支援とSSWとの連携強化による学校復帰に向けた取組

《概要》

当該生徒は、小学校高学年の頃から、教室に入ることができずに別室登校を続けており、中学校入学を機に、登校できなくなったことから、中学校第1学年の前期に通級を開始した。

適応指導教室の雰囲気にも早く慣れて安心できるよう、通級開始当初は、当該生徒の興味・関心が高い活動を位置付けるなど、活動内容を工夫し、継続的な通級を促した。

スクールソーシャルワーカーの活用を含めて学校や教育委員会と連携を図り、徐々に登校する機会を増やししながら、学校への登校意欲や進路選択への意識を高める支援を行った。

《相談・支援等の実際》

目標・方向性

学習内容・活動内容の
自己決定の促進

ICTの活用を取り
入れた個別の学習
指導

人との関りを通し
た自信を高める指導

相談・支援、取組等の状況

- ・個別の教科学習では、学校の授業進度にこだわらずに、各教科の学習内容を自己決定させながら取り組むよう支援した。
- ・集団活動では、運動やゲームなど、他の通級児童生徒との交流を促しながら、活動内容を選択して取り組むよう支援した。
- ・教科学習や集団活動を振り返る時間を設定し、指導員が頑張りを認めたり、向上した点について褒めたりしながら、自己肯定感を高められるよう働きかけた。
- ・個別の教科学習では、学校で使用しているワークに加え、Chromebookを活用したAIドリルへの取組も含め、個に応じたきめ細かな支援を行うなど、学習に向かう環境を整えることに努めた。
- ・自分の気持ちや考えを言葉で伝えるよう指導するとともに、適応指導教室外の様々な人との触れ合いを大切にしながら、当該生徒が自信をもてるように関わるとともに、登校への意欲を醸成する支援を行った。

《取組の成果》

学習内容を含め、各活動において自己決定を促す支援を続けたことにより、意欲的に取り組む姿が見られるようになり、集中して粘り強く取り組む時間が増えた。

ICTを活用した学習支援や進路相談などを通して、当該生徒が自分に合った学習方法を模索し、興味・関心を広げながら主体的に学ぼうとする姿が見られるようになった。

学校と連携しながら、スクールソーシャルワーカーを積極的に活用したことにより、登校の機会を増やすことができ、中学校第3学年への進級を前に、卒業後の進路選択への意欲も高めることができた。

安心できる居場所と魅力ある活動・支援

《 概要 》

学校や家庭、関係機関との連携や、SC・SSWによる支援などにより、不登校の児童生徒個々に応じたきめ細かな支援を進めた。

安心できる居場所と相談による個別支援、自己肯定感を育むために、集団的活動や体験活動等を計画的に実施し、保護者や学校との連携を図りながら支援を行った。

児童生徒の実態を適切に把握して安心できる場所を確保し、成就感や自己肯定感が得られるように様々な活動を工夫するとともに、学校や家庭と情報共有しながら、支援の充実に努めた。

《 相談・支援等の実際 》

目標・方向性

児童生徒の情緒の安定、基本的な生活習慣の改善のための相談活動

【個別支援】

児童生徒の状況に応じた集団的活動・体験活動等の実施

【集団支援】

保護者や学校への支援、啓発及び関係機関との連携

【連携支援】

相談・支援、取組等の状況

- ・集団での行動が苦手な児童生徒については、個別で過ごさせるなど、安心できる居場所を確保するほか、SSWや相談員による個別の相談活動を行い、児童生徒の心のケアに努めた。
- ・毎日の活動を振り返る場面を設定し、指導員がその日の活動を評価するとともに、児童生徒に記録させることで、自己の成長や課題に気付かせるようにした。
- ・クイズやカードゲーム、英語活動、体育活動など集団での遊びを取り入れたことで、児童生徒は自由な発想や会話を楽しみ、和やかな雰囲気が醸成された。
- ・調理実習や農業体験、陶芸教室、高校見学などの体験活動を計画、実施し、作業や様々な人との関わりを通して、児童生徒に協働する喜びや感謝の心を育んだ。
- ・毎月、児童生徒の通級の状況を学校に報告するとともに、SSWが学校を訪問し、不登校の未然防止の校内研修を行った。
- ・専用メールを活用し、毎月の事業案内や個別相談を実施した。
- ・通級する児童生徒の保護者だけでなく、不登校に悩む家庭を対象とした保護者懇談会を実施した。

《 取組の成果 》

集団での行動が苦手な児童生徒に対し、細やかな配慮をもとに根気強く個別の支援を続けたことにより、自己肯定感が高まり、進路選択に積極的に取り組む意欲をもたせることができた。

調理実習、農業体験、陶芸教室及びケア事業の実施等、様々な体験活動を通して、児童生徒に喜びや達成感をもたせることができ、通級に対する意識を高めることができた。

保護者懇談会の開催により、保護者との連携や保護者同士の情報交換を促進し、児童生徒に対する支援につなげることができた。